

日本近代詩作品年表

昭和篇

日本近代詩作品年表

昭和篇

三浦 仁 編

三浦 仁（みうら ひとし）

略 歴

昭和10年（1935）茨城県に生まれる。

昭和41年（1966）東京教育大学大学院博士
課程修了。

現在、山梨県立女子短期大学国文科教授。

編 著

『近代詩一詩と詩論』（昭和45年、東京堂
出版、共編）

『研究 露風・犀星の抒情詩』（昭和53年、
秋山書店）

『日本近代詩作品年表〔明治篇〕』（昭和59年、
秋山書店）

『日本近代詩作品年表〔大正篇〕』（昭和60年、
秋山書店）

『日本現代詩辞典』（昭和60年、桜楓社、共
編）

現住所

東京都八王子市西寺方町1001-82

昭和60年度文部省研究成果刊行費の補助による出版

日本近代詩作品年表〔昭和篇〕

昭和61年 2月15日 第1刷印刷

昭和61年 2月28日 第1刷発行

定価27700円

著 者 三 浦 仁

発行者 秋 山 欣 三

印刷所 三 秀 舎

製本所 渡 辺 製 本

〒180 東京都武蔵野市桜堤1-1-8-302

発行所 秋 山 書 店

電話0422(53)2283/ 振替 東京1-21347

序

かつて三木露風研究を手がけた時、まだ全集も正確な年表もない頃のこととて、作品年表を自分で作る必要に迫られた。その後興味の対象が室生犀星に移った際にも、この方は作品年表はすでに出ていたが不十分な上に誤りが多く、またまた年表作りから仕事を始めなければならなかった。そして両詩人の活躍期が重なるため、同じ雑誌を二度調べることも多かったのである。その時つくづく感じたのは、著名な詩人の作品の初出を示す、総合的な「近代詩作品年表」のようなものがあればどんなに便利であろうかということであった。それぞれの研究者がある詩人を取り上げるたびに初出調査に費やさなければならぬ時間と労力、一人の研究者が新しい対象に向かうたびに同じ雑誌を見直すという手数の無駄、などのことが痛感されたのである。周知のように現在「近代詩年表」として世に行われているものは、詩集の発行年月と主な詩論とを組み合わせた形態のものである。ところがある詩人の作風の成立や展開を探る場合、真に必要なのは個々の作品の初出を知ることであって、詩集の発行年月などは調べればすぐわかることで、詩人研究にどれほど役立つとも思えない。もちろん、近代詩研究が近年盛んになりつつある中で、詩人ごとに詳細な作品年表と取り組む地道な努力が現われてはいる。しかし詩人の数に比すればまだその一部に過ぎなからう。したがって全集・全詩集などと銘うっても結果的に選集に終わっている例も少なくないようである。

このようなことを考えながら、十年ほど前私はまだ中途であった「犀星作品年表」の調査を一時中断し、先に総合的

な「近代詩作品年表」を作ることに方針を切り替えた。後者が出来上があれば、その中から犀星の事項を拾い上げるだけで前者は自然と完成する道理である。未完成であった「露風作品年表」も同時に成立する。

こうして他の仕事は一切顧みず、もっぱら図書館に通い詩人の業績を拾うだけの単調な作業で五年間が過ぎた。更にノートを整理し原稿用紙に書き移すのに二年を費やした。約一千種類三万冊の雑誌をこなした割には、また一人仕事の割には、比較的短い期間ですんだように思う。もちろん年表類に完璧ということはあり得ず、私のそれも欠点の多いものである。特に雑誌の欠号を欠号のままに残したことは責められなければならない。本来ならば個人の所有になる稀観の詩誌なども当たるべきなのであるがその余裕はなかった。また最初は著名な一線級の詩人の作品とその他の主要な業績だけを集める予定であったのが、途中から欲を出し感想・書評等の細かいものまで網羅しようとしたこと、中堅詩人まで対象を拡大したことにより、前後の不統一を来たす結果にもなった。詩人の特殊な筆号を知らなかったために見落したものもあるう。年表からある詩人の事項を拾って配列すれば、その詩人の作品年表が自ずと出来上がるようなものを理想としたのであったが、なおその意図からは遠い。しかし個々の詩人の年表の概略ぐらゐは作るに足りよう。また思いがけない雑誌に思いがけない詩人の名を見出すこともあるうし、今後どのような雑誌を調べればよいかの手掛かりにもなり得よう。いづれにしても、爾後私と同じような「近代詩作品年表」を志す人の現われ、私の不備を補ってより完璧に近いものが世に出ることを期す者であり、年表がこの種の最初の試みとして踏台になることを願って止まないのである。整理の段階で疑問を生じた数百項目については再調査し、できるだけ正確を期したがなお記載の誤りは免れまい。大方の示教を得られれば幸いである。

大量の雑誌を見る関係上、近代文学館・昭和女子大学近代文庫・国会図書館等の係りの方々には非常な御迷惑をおかけした。改めて心からのお詫びと深甚の謝意を表したい。

私事になるが本年表の調査期間中に祖母・母・父を相次いで失った。拙い本書を祖母・両親の霊に捧げる。

なお本年表は、「明治篇」は昭和五十八年度の、「大正篇」は昭和五十九年度の、「昭和篇」は昭和六十年年度の、文部省研究成果刊行費の補助を受け、秋山書店主秋山欣三氏の尽力によって刊行の運びとなったものである。

昭和六十一年一月十五日

三 浦 仁

凡 例

一、本年表は、明治初期から昭和三〇年に至る期間の約一千種の雑誌を調査し、近代詩人の業績を収集してこれを年月ごと雑誌ごとに整理したもので、個々の詩人の年譜の作成、全集の編纂、初出の確認、研究史の整備等に資せんとするものである。

一、調査の対象とした雑誌の種類は、詩誌・綜合誌・一般文芸誌・同人文芸誌・婦人雑誌等のほか、少数の歌誌・音楽誌・少年誌に及ぶ。

一、詩人兼小説家・詩人兼歌人等の場合、詩だけでなく小説や短歌関係の業績、さらには評論・隨筆・日記・書簡等も広く拾うようにとめた。著名な詩の翻訳家や詩論家も詩人と同列に扱った。また執筆者は詩人や詩論家でなくとも、詩人に関する記事は研究史の整理の便をはかって拾うことにした。

ただし、一時期少数の詩を書いたにすぎないような作家については網羅主義を取らず、詩関係の業績だけを拾った。なおこれに関連するが次の諸作家については、調査の段階では広く他のジャンルの項目も集めたのであったが、整理の段階

では詩関係の事項以外は削った。これらは詩以外の分野での活躍の方が大きい人達であり、紙数の関係でそれらを全て収めることができなかったのである。

池袋清風・石井柏亭・伊藤整・伊藤野枝・井上哲次郎・井伏鱒二・植木枝盛・生方敏郎・江南文三・大町桂月・大和田建樹・勝海舟・加藤周一・加藤朝鳥・北畠八穂・北村喜八・木山捷平・窪田啓作・今官一・嵯峨之舎御室・釈迺空・神西清・末松謙澄・高見順・高安月郊・田山花袋・茅野雅子・辻野久憲・寺崎浩・戸川秋骨・土岐哀果・外山正一・永井荷風・中村秋香・中村真一郎・西出朝風・西宮藤朝・野尻抱影・野間宏・灰野庄平・長谷川四郎・畑耕一・馬場孤蝶・林美美子・平田禿木・福永武彦・増田篤夫・森鷗外・矢田部良吉・柳田国男・山川登美子・山路愛山・山田美妙・依田学海。

一、既に公刊されている各種雑誌の総目次類もあるが、それらには頼らず実際に雑誌に当って確認した事項のみを取り上げた。小田切進氏編『現代日本文芸総覧』に採用されている雑誌は

二つ以上のジャンルにまたがって作品を並列する場合は次のように示した。

例 月見草(詩)・まつよひぐさ(同)・月の出(短)

一、二つ以上の訳詩の原作者が同じである場合はその最後に原作者名を入れた。

例 八詩二章∨とりいれ・黄ろい小路(ジョセフ・キヤンベル)

原作者の異なる訳詩を並列する場合は次のように示した。

例 孤独(ボードレール)・港(同)・種子(ランボー)

一、ジャンル名は次の略号によって示した。

(長)	—— 長歌	(民)	—— 民謡
(短)	—— 短歌	(俗)	—— 俗謡
(俳)	—— 俳句	(童)	—— 童謡
(今)	—— 今様	(唱)	—— 唱歌
(漢)	—— 漢詩	(軍)	—— 軍歌
(小)	—— 小説	(感)	—— 感想
(戯)	—— 戯曲・脚本	(日)	—— 日記
(品)	—— 小品	(簡)	—— 書簡
(美)	—— 美文	(消)	—— 消息

(紀)	—— 紀行	(評)	—— 評論・批評・詩論
(隨)	—— 隨筆	(伝)	—— 伝記・自伝・評伝
(研)	—— 研究	(書)	—— 書評
(紹)	—— 紹介	(月)	—— 月評
(談)	—— 談話	(時)	—— 時評
(座)	—— 座談会	(悼)	—— 追悼
(ルポ)	—— ルポルタージュ		

その他必要に応じて(奇談)(回想)等の区分を用いた。ただしこれらジャンルの区別はいちいち内容を読んだ上で行ったわけではないので必ずしも厳密ではない。また散文で題名によって内容の推し量れるものには特にジャンルを記さなかった。

一、投稿作品は次の略号によってジャンルを示した。

(投詩)	—— 投稿詩	(投文)	—— 投稿文
(投歌)	—— 投稿短歌	(投漢詩)	—— 投稿漢詩
(投句)	—— 投稿俳句	(投漢文)	—— 投稿漢文

一、標題だけでは内容の解りにくいものに、()で説明を加えた場合がある。

例 「最近の詩集」(↓『有明集』評)

一、韻文の連載作品(長詩・劇詩等)は一回ごとに記載し、初回

調査対象からはずし重複を避けた。既に調査されている雑誌よりも、埋もれた雑誌を一つでも多く取り上げたいという趣旨からである。ただし重要な詩誌に関してはこの限りではない。雑誌「新潮」は、投稿欄を見る必要から明治・大正期を、また、『総覧』で省かれた戦後期を、それぞれ調査の対象とした。

一、投稿欄を設けている雑誌に関しては、各詩人の出発期の状況

表 記

一、月数は、「何月号」と標示のある場合はそれに従い、標示のない場合は発行月に従った。

二、各月ごとの雑誌の配列はアイウエオ順とした。

一、明治期の雑誌には月二回以上発行されたものが多いので、明治期のみ（日付）の欄を設け、二回以上発行された場合には原則として発行日を示した。

一、作品名に「」を付してないものは韻文（詩・短歌・俳句・民謡・童謡・漢詩等）であるが、このうちジャンルの指示のないものは全て詩（散文詩を含む）であり、その他には作品

を明らかにするため詩投稿欄を調査の対象とした。主要な雑誌については短歌・俳句・漢詩・散文等の投稿欄にも一応目を通した。

一、明治前半期は記載事項が少いので、新体詩界全体の動向を知る参考として無名詩人の作品も拾った。また長歌・今様の復活を示すもの、新時代の素材を詠んだ旧詩型の作品など、新体詩の誕生に多少なりとも関連のある事項を取り上げた。

名の下に（短）（俳）等のジャンルを示した。「の歌」「の雑詠」のように短歌その他とまぎらわしいものでも、（短）等の指示のない場合は詩である。

一、詩は原則として総題だけでなく一篇ごとに題名を記した。

△ ∨は総題およびそれに準ずるものを示す。総題以外に小総題が必要な場合は△ ∨を用いた。

一、同じジャンルの二つ以上の作品の並列の場合はその最後にジャンルの名を示した。

例 夜の雨・面影・その夜（短）

調査対象雑誌一覧

本年表の利用の便をはかり、また今後同様の年表の作成を試みる人の参考に資するため、調査の実情を示しておきたい。ただしこの中には、調査はしたが記載すべき事項のなかった雑誌も少数ある。(雑誌名はアイウエオ順。同名の雑誌が二つ以上ある場合は発行所によって区別した。間に休刊がある場合は第一次・第二次と区別する方法でおおむね統一した。)

一、全号通して見ることできたものは次の諸誌である。

青ガラス・赤と黒・亜細亜・アララギ(大6年まで見)・アルス・荒地(岩谷書店)・江戸紫・屋上庭園・オルフェオン・音楽界(大12年まで見)・改造・改造文芸(第一次・第二次)・歌学・我観(大正期のみ見)・学芸志林・学生・学窓余談・花月新誌・家庭雑誌(家庭雑誌社)・家庭雑誌(由分社)・火鞭・仮面・Gala・我楽多文庫・関西文学・感情・黄蜂(別冊を含む)・黄薔薇・伽羅文庫・旧幕府・今日・饗宴(第一次・第二次)・近代詩苑・近代風景・近代文学・国のもとゝ・胡桃・黒潮・群像・芸苑(文

友館)・芸術(芸術社)・芸術(八雲書店 別冊を含む)・芸文・月刊スケッチ・現代(講談社)・現代詩(詩と詩人社)・現代詩(百合出版)・現代人・高原(鳳文書林)・好古雑誌・江湖文学・高踏・国粹・国民之友・心(第二次)・小柴舟・コスモス(コスモス書店 第一次)・午前(南風書房)・国光・今世少年・座右宝・奢潮都・番紅花・サンエス・三十日・サンドル・産物・朱樂・三籟・詩(ニューポエトリ社)・詩歌(第一次)・詩歌(第二次 昭和7年まで見)・詩歌時代・史海・詩学(詩学社)・しがらみ草紙・時間(第二次)・四季(第一次)・第三次)・詩研究(宝文館 復刊号)・詩 現実・詩行動(詩の仲間社)・詩作(詩作社)・詩人(詩草社)・詩人(詩人発行所)・詩人(文学案内社)・詩人(矢代書店)・詩聖(玄文社)・詩箋・自然(自然社)・自然と印象・詩と音楽・詩と詩論・詩文学(中外文芸社 第一次)・社会(鎌倉文庫)・縮図・出版・趣味(第一次)・小説公園・小説新潮・小天地(金尾文淵堂)・小天地(小天地社)・城南評論・少年園・少年世界(明治期のみ見)・小文学(小文学発行所)・昭和文学・

にジャンルを示した。散文は初回のみ記載し、終結年月の判明しているものにはその旨を記した。また欠号のため判明しないものには確認できた最後の年月を示した。

例 「十八世紀イギリス文学」(評) 12年4月

「日本の詩歌と自然」(評) 12年4月まで確

断続連載も特に区別せず右の表記法によった。

一、二つ以上の作品を並列する場合は中グロ「・」を用いた。元の記号が中グロであって作品の並列以外の場合、右の作品の並列と混同しやすいので「、」「||」「一字アケ」等に記号を変更した。

例 アルチュール・ランボー↓アルチュール||ランボー

三木・萩原両氏の詩作態 三木、萩原両氏の詩作態

度を論ず ↓ 度を論ず

「酒・女・旅」(随) ↓ 「酒 女 旅」(一篇の標

題の場合)

一、詩人名欄に二人以上を並記する場合、ひじょうに著名な人名

であるか、または同じ号の雑誌に名前が出ていてはつきりそれとわかる時は、姓の方を省いた。

例 北原白秋・三木露風↓白秋・露風

一、翻訳作品の下に示す原作者名は、著名な作家で他と間違えるおそれのない場合、元の表記より簡略化したものがある。

例 (オスカー||ワイルド) ↓ (ワイルド)

(フランソワ||ヴィヨン) ↓ (ヴィヨン)

(カール||サンドバーク) ↓ (サンドバーク)

一、旧漢字はできるだけ新字体に改めた。

一、その他本書としての統一をはかる上から、元の表記を変更した場合がある。

例 「若菜集」について ↓ 「若菜集」について

△二三の蠅他五篇▽ ↓ △二三の蠅 他五篇▽

「芋掘藤五郎その他」 ↓ 「芋掘藤五郎 その他」

「南方紀行 一」 ↓ 「南方紀行 (一)」

「続南方紀行」 ↓ 「続 南方紀行」

次)・都の花・明星(第一次・第二次)・未来(第一次・第二次)・民間雜誌・民衆・名家談叢・明六雜誌・めざまし草・木星(第一次)・山鳩・ゆうとびあ・雄弁・幼年雜誌・よしあし草・羅針(第二次)・リラ・令女界(第二次)・曆象・歷程(戦後期)・列島・驢馬・早稲田文学(第一次・第五次)・我等(我等発行所)・我等(我等社)

二、少数の欠号を除いて、ほぼ全号通して見ることできたものは次の諸誌である。

愛国志林・愛誦・愛の本・以良都女・エゴ(第一次・第二次)・音楽(大9年まで見)・音楽新報・科学と文芸〔近代思潮〕を含む)・学生文芸・学校・家庭文芸・歌文新誌・旗魚・芸苑(左久良書房)・芸苑(巖松堂 第一次)・閨秀新誌・芸術(芸術社)・現代詩歌・現代詩研究・国文学(国文学雑誌社)・心(第一次)・心の花(明治期のみ見)・古今文学・コスモス(コスモス書店 第二次)・ザムボア(紫烟草社)・椎の木(第一次)・詩界・詩原・詩研究(宝文館 第一次)・詩行動(詩行動社)・至上律(第二次「ボエジイ」を含む)・詩人時代・詩世紀・自然自然詩社 第一次)・時代思潮・七人・思潮・詩の家(第二次)・詩法・純粹詩(市民書肆)・少国民・小説朝日・小説界・小説萃錦・象徴・

少年(明治期のみ見)・少年文庫・少年文集・女子文壇(女子文壇社)・処女・処女文壇・女性(プラトン社)・女性改造(第二次)・白孔雀・新興芸術・新古文林・新女苑(昭和20年まで)・新声・新著月刊・新日本(富山房)・新文学(全国書房 第二次)・新領土・世紀世紀社・世紀(三笠書房)・精神修養(明治期のみ見)・世界之日本・世代(近代社)・世代(目黒書店・ユリイカ)・創造(劇と詩)改題)・創造(創造社)・太平・炬火(第二次)・地上巡礼・知性(第一次)・中学世界(明治期のみ見)・手紙雜誌・天鼓・東亜之光(大正・昭和期)・東京・東西・日光・ニヒル・日本之少年・日本文学者(第一次)・ハガキ文学・博浪沙(第二次)・バリケード・馬鈴薯・反響(第一次)・晩近詩獵・伴侶・ビートルズ・風景・婦女界(昭和戦前記)・婦人朝日(第二次)・婦人画報(東京社 明治期)・婦人画報(昭和期)「戦時女性」を含む)・婦人公論(大正期)・婦人世界・葡萄・文華(文泉館)・文学会議(新生社)・文芸俱樂部(大正期)・文芸雑誌・文芸主潮・文芸汎論・文芸読物・文庫(三笠書房)・媽祖・未成年・未来(第三次)・武蔵野(今古堂)・眼・モザイク・やまと錦・四人・ラ テール・炉(昭和21年以後)・蠟人形(第一次)・悪い仲間・我等の詩

三、創刊号から通して見てはいるが、終刊の年月が確認できないため、全号見たか否か不明のものは次の諸誌である。この場合は私の見た最後の号の号数または年月を示した。この中には実際には全号見ているものも多いと思われる。

愛の泉(33号)・アダム(11号)・郁文雑誌(4号)・一致(2号)・ヴァリエテ(7号)・雅学新誌(10号)・学庭新誌(10号)・学友(明36・12)・学友(学友社 明39・3)・家庭之友(明43・8)・鐘(鐘が鳴る)を含む 15号)・9(3号)・郷土(6号)・近代詩獵(15号)・今文(2号)・critic(2号)・経世評論(19号)・現代詩評(6号)・紅炎(3号)・国詩(6号)・国文学(日本文学)改題 10号)・ことばのはな(14号)・この文(2号)・犀(7号)・さいらく(2号)・作文之友(3の10)・詩歌殿(2号)・詩と真実(関西詩人会 9号)・詩と美術(3の5)・詩の泉(3号)・詩の国(2の1)・詩豹(10号)・詩風土(復刊2号)・社会(富山房 3の1)・純粹詩(純粹詩社 3号)・純文学(純文学社 8号)・純文学(新陽社 3号)・小鼓(3号)・少年子(右文社 2の4)・女学叢誌(明20・8)・女子文芸(女子文芸社 3号)・女子文壇(婦人文芸社 2号)・新韻(松江 新韻社 2号)・新学界(2の3)・新形式(3号)・新国学(14号)・新女学(4号)・新進文壇(2号)・新日本(新日本同盟社 2号)・新

日本(新日本社 2の2)・新日本(小山書店 昭14・8)・新婦人(新婦人社 12号)・新文芸(新文芸社 大11・2)・隨筆趣味(6号)・生活を歌ふ(湖)から通刊11号)・青春(桃源社 2号)・青年(ハガキ文学)改題 明44・6)・青年日本(5号)・1933年(2号)・短詩世界(3号)・暖流(5号)・中外評論(28号)・中学(4号)・中学新誌(明32・9)・つばみ(明25・4)・手帖(野田書房 16号)・東京文学(4号)・西日本文芸(6号)・日本詩(宝文館 6号)・日本詩壇(日本詩壇社 復刊3号)・八紘(立教学校文学会 18号)・微光(第一次 3号)・響(2号)・ファンタジア(3号)・婦人春秋(4号)・婦人文芸(昭12・8)・芙蓉(芙蓉社 4号)・文(4の12)・文園(文園社 12号)・文園(香心社 明37・5)・文苑(2号)・文海(2の8)・文学世界(春陽堂 11号)・文学叢誌(16号)・文学読本(4号)・文学の世界(4号)・文学風景(2の3)・文芸(小柴舟)改題 3号)・文芸新風(3号)・文人(5号)・文体(文体社 昭9・8)・文明新誌(集思社 32号)・平民之友(10号)・ベニスズメ(3号)・鱒(8号)・三田詩城(6号)・むさしの(東洋文学会 明36・11)・明治文芸(5号)・明笛(7号)・もしほ草紙(6号)・大倭心(3号)・旅行と文芸(5号)・ルネサンス(9号)・呂(7号)・感星(2号)

四、創刊号のみ見たものは次の諸誌である。全て終刊の年月は不明であるが、この中には一号で廃刊になった雑誌が多いと思われる。

あるの・一家・印象(印象詩社)・Echo・海都・架空・価値(価値詩社)・近代文芸(近代文芸社)・金と銀・芸苑(九州文学社)・芸苑(巖松堂 復刊号)・現代詩(現代詩社)・現代詩人・現代文化・紅塵・国民詩・コスモス(叢文閣)・午前(日本詩学協会)・昆侖・作と評論(作と評論社)・三芸・詩(詩芸術社)・詩(詩の会)・詩心・詩人(交友社)・詩人倶楽部(文芸日本社)・詩聖(民謡詩社)・詩想・詩層・詩壇消息・詩潮・詩と絵・詩とコント・詩の本・詩文学(中外文芸社 復刊号)・詩魔(復刊号)・姉妹(日新閣)・自由詩人(理想社)・自由文壇・小品文学・小文学(少年園)・女子文芸(日本葉書会)・女性詩歌・新詩学・新時代(啓成社)・新文学(新文学社)・スバル(振社)・青春(文化社)・青年作家・大鵬・大洋文学・知慧樹・地上(地上社)・都会人・Transition・はがき新誌・反響(復刊号)・彼岸・不同調(第三次復刊号)・文学層・文芸作品・文章法・街(詩人倶楽部)・みかしは・ゆふ雁・揺籃・緑星

五、欠号の比較的多いもの、または一部分しか見られなかったもの

のは次の諸誌である。

愛国新誌・マロウ・青い馬・青い花(青い花発行所)・青山評論・赤い花・アカツキ・亜寒帯・足跡・葦分船・アルス・グラフ・アルト・アルビレオ・荒地(青騎書房)・荒地(荒地発行所)・いささ川・穎才新誌・エクリバン・大阪文芸・鷗夢新誌・嚶鳴雜誌・小琴・樺・海市(海市発行所)・海市(神奈川 詩学社)・海潮・街路樹・学生筆戦場・鵲・合唱・活文壇・鐘が鳴る(鐘が鳴る社)・河・紀元(三笠書房)・驥尾団子・曉星・麒麟・近事評論・近代詩歌(近代詩社)・近代詩人・苦惱者・クラルテ・黒百合・劇と詩・現在・現代詩精神・現代詩評論・現代詩文・現代文芸素人社)・高原(高原詩社向上会)・交詢雜誌・行人・交替詩派・国士・黒耀・コルボオ・今日の詩・今日の文学・才媛文壇・柵・山河・三光・珊瑚礁・三人・詩(詩発行所)・詩(佐々木秀光編)・詩歌時報・椎の木(第三次)・詩王・シキシマ・詩研究(詩研究社)・詩集(詩集社)・詩集(Jungクラブ)・詩神・詩人会議(前衛詩人連盟)・詩人倶楽部(詩人倶楽部社)・詩精神(前奏社)・詩叢・詩壇・詩展・詩と散文(金星堂)・詩と散文(詩と散文社)・詩と詩人(第一次・第二次)・詩と人生(青年社)・詩と人生(詩と人生社)・詩と文学・詩之家(第一次・篠笛・詩半球・詩風・詩風土(第一次)・詩文化・詩文学(武蔵野書院)・詩文学(横浜詩

人クラブ)・詩文学研究・詩篇・社会詩人・車前草(第二次)・秀才文壇・自由詩・自由詩人(自由詩人社)・主観・朱雀・趣味(第二次)・棕櫚の葉・純正詩社雑誌・純文学(抒情詩社)・詩洋(昭和19年まで)・小文学(小文学社)・小文庫・小文林・昭和詩人・女学新誌・女子文苑・抒情・抒情詩(抒情詩社 第一次)・抒情文学・女性(新生社)・書窓・新月・新興・新興日本詩人・辛巳・新詩人(詩人会)・新詩潮・新詩派・新詩論(アオイ書房)・新人(新人社 明治期のみ見)・新進詩人・新世紀・新青年・新世間・新創作・新天地(世光社)・新風(大阪新聞社)・新婦人(文化実業社)・新文学(帝国新文学会)・新文学(全国書房 第一次)・新文芸(岐阜 新文芸社)・新文士・新文壇・人民・森林・スバル(富山 スバル文化会)・星光・星座(星座発行所)・星座(星座社)・精神・青年(帝国中学会)・青年(青年社)・前衛詩人・仙火・930・千紫万紅・祖国学苑社 第一次・第二次)・祖国(まさき会)・苑(月刊)・第一書・大道・太平洋・太陽花・竹・短歌雑誌(第二次)・断層・地球(第二次)・血汐・地上(地上社)・地上楽園・秩序・中央學術雑誌(第一次)・中央文学(忠誠堂)・中央文学(春陽堂)・中学文芸(秀英社)・中学文芸(読売新聞社)・中学文壇・中学文林・角笛・田園文学・伝統・東京新誌・東京派・冬夏・同志社文学・同人社文学雑誌・道程・東北文壇・ト

キハギ・途上に現はれるもの・秦皮・とらんしゅと・トロイカ・南方の花・虹・20世紀・日本一・にひしほ・日本詩壇(日本詩壇社 第一次・第二次)・日本詩壇(日本書房 第一次)・日本之女学・日本の風俗・日本評論(日本評論社)・日本文学者(第二次)・日本文芸(文潮社)・女人詩・<〇〇(第一次)・俳諧新報・白虹・白山詩人(第一次・第二次)・博浪沙(第一次)・花(花社)・麵麴(麵麴社)・麵麴(青樹社)・帆船(第一次)・葉・緋縮緬・姫百合・表現(二松堂書店)・評論(女学雑誌社)・風雅新誌・風経・婦女界(明治・大正期)・婦人(全関西婦人連合会)・婦人朝日(第一次)・婦人界(金港堂 第二次)・婦人画報(独歩社)・婦人倶楽部(大正期)・婦人之友(昭和20年まで)・豚・フェウザン・文華(北国毎日新聞社)・文学祭・文学雑誌(日本文学会)・文芸(文芸社)・文芸王国・文芸耽美・文芸通報・文芸日本(文芸日本社 第一次)・文芸の先駆・文芸復興・文光・文陣・文則・文壇(小西書店)・文明新誌(文明新誌社)・母音・鳳鳴新誌・ホノホ・マヴォー・魔法・満洲詩人・曼珠沙華・虫籠・無名通信(明治期のみ見)・むらさき・明義・明星(第三次)・明治会叢誌・木星(第二次)・八少女・野獸群・洋々社談・与論新誌・楽園・羅針(第一次)・六合雑誌・リズム・リベルテ・坩堝・令女界(第一次)・黎明調・歷程(戦前期)・若草(第一次)・私達

六、間に欠号がある上、発行の全貌が明らかでないため、ほぼ全号見ているのか(二か)、全体の一部分しか見えていないのか(五か)、判明しないものは次の諸誌である。

印象(印象詩社)・韻文学・大阪文学・学の友・火柱・橄欖(向陵詩社)・近代詩歌(長谷川書房)・月曜・現代(現代社)・言文一致・国文・作と評論(朱雀社)・さをしか・三角帽子・詩学(東京詩学協会)・四国文学・詩作(芸苑社)・詩章・詩精神(千葉詩人会)・詩の座・小学雑誌・少年子(協習会)・抒情詩(抒情詩社 第二次)・新時代(新時代社)・新詩壇・新日本(新日本社)・新風(新風社)・新文芸(新文芸社)・精華・青年文壇・尺牘・短歌と詩・血潮・東京与論新誌・桃源・独立詩文学・内在・莫告藻(第二次)・南紀芸術・日本詩(アキラ書房)・日本文芸(しらゆふ会)・野火・白楊・微光(第二次)・百字文・不確定性ペーパー・婦人界(東京社)・婦人解放・婦人矯風雑誌・文の友・PREFACE・プロレタリア音楽と詩・文学界(聚芳閣)・文芸ウアリエテ・文芸共進会・文星・文鳥・文明の母・菩提樹・北方文芸・窓(窓詩社)・むさしの(古今文学会)・明治の歌・明治文学園・明治文学(明治文学会)・メッカ・木香通信・山の樹・零度

付、次の諸誌は、調査は行つたのであるが、整理の段階で紙数の関係から削除したものである。

赤とんぼ・朝日評論・亜細亜詩人・イーハトーヴォ・橄欖・樗の実・キング(富士を含む)・金の船・金の星・苦楽(プラトン社)・苦楽(苦楽社)・芸林間歩(第一次・第二次)・月刊文章講座(月刊文章を含む)・こども雑誌・詩性・詩声・詩と歌謡・詩と歌謡と・小説と読物・女性詩・女流詩人・新作家・新詩人(新詩人社)・新女苑(戦後期)・新民謡研究・随筆(矢代書店)・随筆(二十七日会)・随筆(随筆会)・随筆(産経新聞社)・随筆四季・創元・騷人・中央公論文芸特集・東国・ドノゴトンカ・とんぼ・日本国民・日本詩壇(第二次)・女神・人間(鎌倉文庫)・人間別冊(を含む)・風流陣・不同調(第二次・第三次復刊号)・文学国土・文学雑誌(三島書房)・文学集団・文学草紙・文芸首都(第一次・第二次)・文芸大学・文芸道・文芸日本(文芸日本社 第二次)・別冊文芸春秋・ポエトリア・幌馬車・本・民謡詩人・八雲・読売評論・Red・蠟人形(第二次)・若い人(第一次・第二次復刊号)・若草(第二次)

目

次

序

凡 例

表 記

調查対象雜誌一覽

年 表

昭和二年	三
昭和三年	三九
昭和四年	七二
昭和五年	一〇七
昭和六年	一四一

昭和七年	一七六
昭和八年	二〇八
昭和九年	二四一
昭和一〇年	二八〇
昭和十一年	三一七
昭和十二年	三五一
昭和十三年	三七八
昭和十四年	四〇四
昭和十五年	四三三
昭和十六年	四六三
昭和十七年	四九〇
昭和十八年	五一四